233

小松原（こまつばら）古墳

（薩摩郡鶴田町柏原字上小幡）

位置と環境

遺跡は市街地から南西に約３.5km離れた，川内川の支流をのぞむ，標高約60ｍの台地上に立地している。本遺跡と同様の地下式板石積石室墓群である鶴田町湯田原古墳は，東北に約４kmの所に位置する。

調査の経緯

昭和48年，県道の拡張工事中に発見された。昭和52年12月から53年１月にかけて，鶴田町史編纂事業の一環として，上村俊雄らにより発掘調査並びに復元作業が行われた。遺跡は現在古墳公園化されている。

遺構と遺物

７基の墓が確認されており（第２図），そのうちの６基は地下式板石積石室墓である。残る１基（III号墳）は，方形の土壙墓と考えられる。地下式板石積石室墓の葺石の多くは，耕作により取り除かれてしまっていた。

Ⅰ号墓の石室プランは，内径120cmのほぼ円形を呈する（第３図）。石室を構築するための掘り込みは直径160cmの円形を呈する。粉状の人骨と朱のかたまり，鉄鏃12本が出土している（第４図）。

II号墳の石室プランは，90～100cmのほぼ円形を呈する（第５図，写真１）。人骨と鉄鏃８本が出土している（第７図－１～６）。

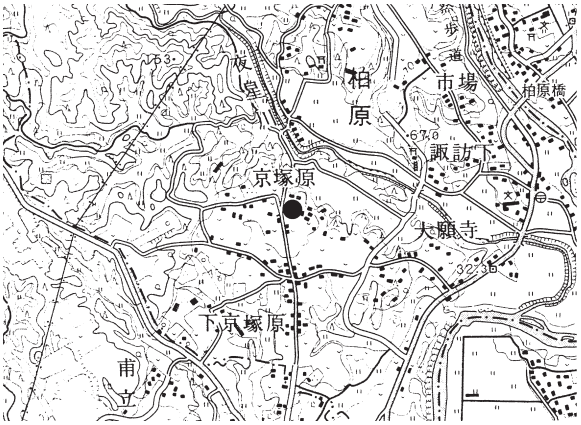
III号墳は方形の土壙内に，長さ140cm，幅80cm，高さ80cmにわたって，百数十個の自然石を整然と積み重ねている（第６図）。土壙内から縄文晩期，古墳時代の土器片や刀子が１点出土している（第７図－７）。

Ⅳ号墳の石室プランは，内径110cmの円形を呈する。人骨と鉄鏃３本，刀子状の鉄器が出土している。鉄鏃は石室外からも出土している。

Ⅴ号墳の石室プランは，内径100cmの円形を呈する。石室構築のための掘り込みは直径150cmを測る。石室内から人骨片，朱のかたまり，鉄鏃４本が出土している。

Ⅵ・Ⅶ号墳は本遺跡発見の端緒となったもので，道路断面に残存している。Ⅵ号墳はほとんど壊されており，Ⅶ号墳は全体の３分の１程度が残存している。

石室のプランが円形であること，板石を縦方向に用いることなどから，本遺跡の板石積石室墓は後出する特徴を有する。出土遺物のほとんどは鉄鏃で，圭頭式，三角式，椿葉式などがみられる。鉄鏃や遺構の年代観から５世紀を中心とする時期に比定できると考えられる。



第１図　小松原古墳の位置

特徴

石室の内径が90～120cmであることから，被葬者は屈葬されていたと想定されている。人骨や副葬品の出土状況から，頭位が北または北東であったと推定され，一定の規律のあったことが指摘されている。また，密集しているにもかかわらず，遺構間に切り合いがみられないことから，蓋石の一部が地表に露出していたか，盛り土をし，墓の位置がわかるようにされていた可能性が示されている。

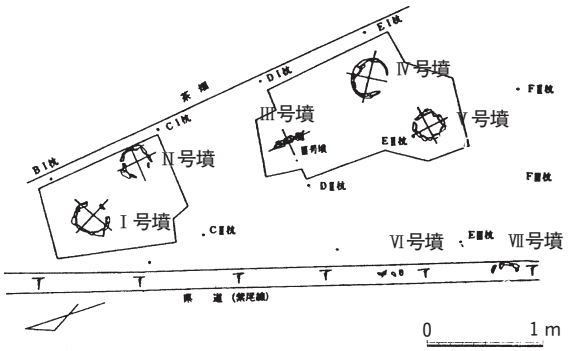
資料の所在

出土遺物は，鶴田町教育委員会に保管されている。

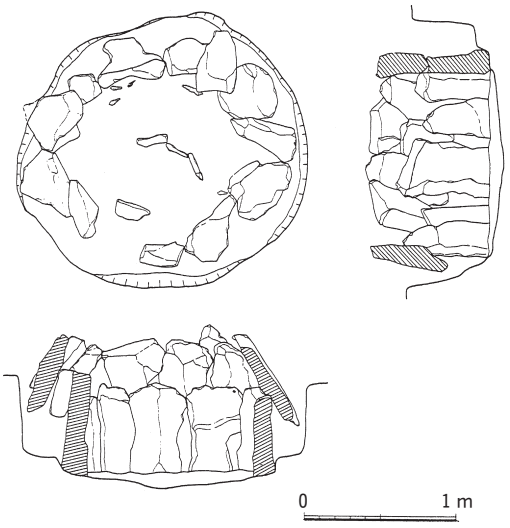
参考文献

上村俊雄1979「小松原古墳」『鶴田町史』鶴田町
上村俊雄1992「小松原地下式板石積石室群」『鹿児島考古』26

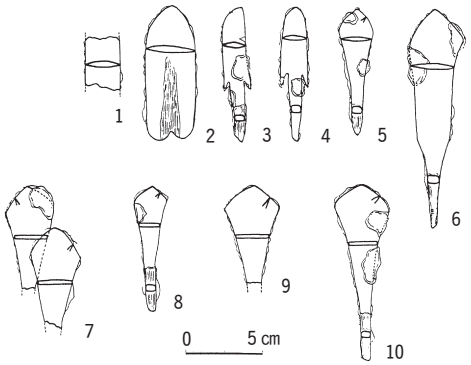
（大西智和）



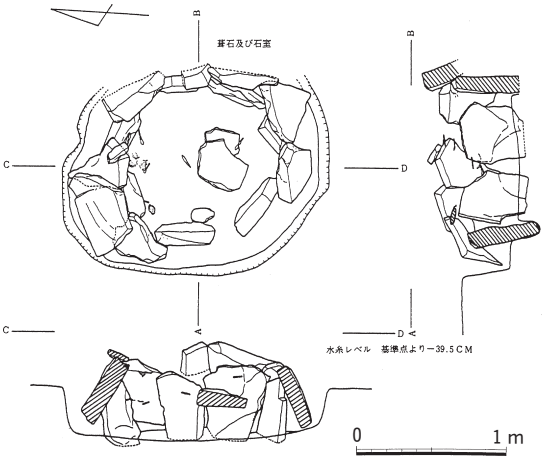
第２図　Ⅰ～Ⅶ号墳分布図



第3図　Ⅰ号墳

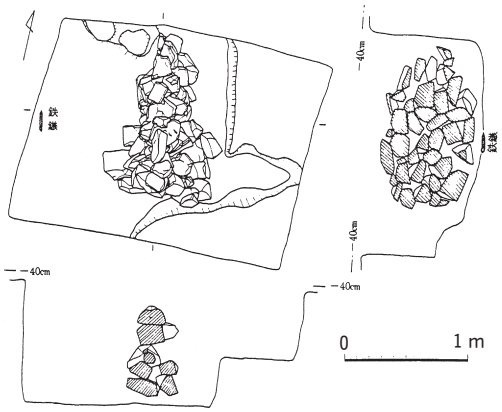


第4図　Ⅰ号墳出土遺物

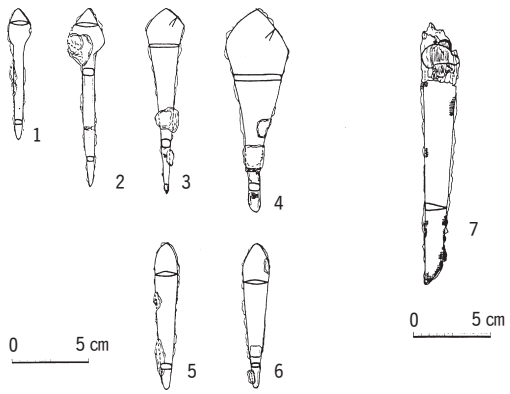


第5図　Ⅱ号墳

写真1　Ⅱ号墳



第6図　Ⅲ号墳



第7図　Ⅱ・Ⅲ号墳出土遺物（1～6：Ⅱ号墳　7：Ⅲ号墳）